

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第666号 平成25年12月27日

## 法律で「飲み過ぎ規制」

12月7日、参議院本会議において「アルコール健康障害対策基本法」が全会一致で可決成立しました。

厚生労働省の調査によると、全国の「アルコール依存症」の患者は約80万に達するものの、その内治療を受けている者は4万に過ぎないといわれています。こうした中、飲酒運転による重大な事故や飲酒に絡む健康被害、暴力事件等、様々な社会問題が多発しており、患者団体や医療関係者からは、飲酒問題に対する総合的な対策を推進する為の法整備が求められていました。

私達は、何気なく「アル中」という言葉を使ったりしますが、そこには「飲んだくれ」とか「意志が弱い」「ダメ人間」といった評価（偏見）が付き纏っている事は否定できません。これに対してアルコール問題全国市民協会(ASK)では、飲酒をコントロールできないのは、意志が弱いからではなく病気の症状なので「アル中」という言葉は適当ではないとしています。

「アルコール健康障害対策基本法」の成立によって、今後「アルコール依存症」に対する偏見が解消して欲しいと思っていますし、何より、「アルコール依存症」患者に対する治療等、国や自治体による飲酒問題に対する総合的な対策が促進される事を期待しています。

また、子ども達には、望ましい生活習慣を身に付けさせる為にも、様々な機会を通じ「アルコール依存症」の深刻さ等について指導して行く事が必要です。

さて、飲酒に絡む問題は、新たな法律を必要とする程深刻な状況にあります。その最大の理由は、自己管理の難しさという事でしょう。つまり、飲みたい欲求をコントロールする事は、酒飲みにとっては非常に難しいという事です。こうした難題に、明るい話題が一つあります。それは、大塚製薬が「アルコール依存症」に対する新たな治療薬の開発に着手するという記事（11月1日付日本経済新聞）で、それによると、その薬は中枢神経に作用して飲酒したいという欲求を押さえる効果があるそうです。酒飲みにとっては複雑な心境でしょうが、「アルコール依存症」に係わる問題解決の為には、一日も早い製品化が待たれるところです。

日本では「飲みニュケーション」という言葉が有る様に、人間関係を作る上でお酒は重要な役割を果たして来ました。しかしその一方で、以前から「酔っ払い」に

対して寛容で甘い社会ともいわれて来ました。そうした甘さが、何時まで経っても飲酒に絡む様々な問題が無くならない背景にあるといわざるを得ません。こうした「酔っ払い」天国ともいえる日本の社会につける薬はなさそうですが、「アルコール健康障害対策基本法」の成立が、「アルコール依存症」患者に対する対策の促進だけでなく、「酔っ払い」に甘い日本社会の体質や空気を変えて行く契機になればと願っています。

さて、いよいよ長い年末年始が始まります。皆様には、くれぐれも飲み過ぎには注意して、良き新年をお迎えください。（塾頭：吉田 洋一）